

情報機器の普及が住生活に与える影響について

○定行まり子* 富田理枝* 椋木奈美*

(*日本女大)

目的 情報化の進行は、様々な分野に多大な影響を与えてきているが、その情報化の波は、家庭や個人にも及んでいる。本研究では、情報機器の家庭での利用実態を把握し、情報化が家庭や個人の生活のスタイルや住まい方に与える影響について考察していく。

方法 都市に立地する集合住宅として金沢区の3団地を選定し、そこに居住する一般世帯を対象として、各戸訪問留め置きにより、各世帯及び個人の利用メディアやテレビ・パソコンに対する意識、住戸内での設置場所等について、アンケート調査を行った。調査は1997年11月に実施し、回収数は195世帯583人（回収率59.6%）である。

結果 従来からあるTV、電話、新聞といったメディアはすべての世帯に普及し、TVについては、どの世代についても利用率が高い。一方、昨今顕著に普及してきた移動体通信機器やパソコンといった新しいメディアは会社員や若年世代に高い利用がみられるが、高齢者の利用の低さが目立ち、世代間の相違が浮き彫りにされた。TV・パソコンは有効な情報源と捉えているものの、TVについては我々の生活にゆとりを与えてくれるものとは考えていないことがわかった。TVは一家に2台が一般的となっており、2台目からは個人に所有され、その6割が子どもで、個室に持ち込まれるケースが多い。パソコンや2台目以降のTVは個室に、また、余剰室に設置され、情報機器の位置づけは住宅の空間計画に際し、重要な要因となってくることが示唆された。今回の調査結果から、高齢者などの情報弱者の問題や家族のつながりの希薄化への懸念がみられ、情報機器の選択、住戸計画、住まい方等について取り組むべき課題が提示された。